

第64回卒業式挙行

284名の卒業生が希望の学び舎を巣立つ



第125号
発行
2026年
3月25日(水)
校会
高田西
新聞委員
編集局
編集局長：菊池ひとみ
新聞委員長：斎藤瑠心
未侑
美唯
七菜
綾郁
小島
大村
中村
市村
レイアウト：菊池ひとみ

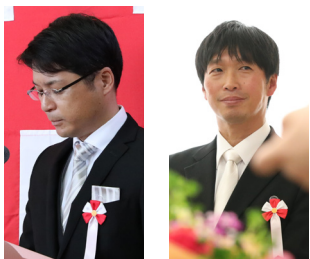


卒業生答辞を読み、頬を濡らす真坂さん

3月7日(土)に本校体育館で第64回卒業証書授与式が挙行政され、284名の卒業生が学び舎を巣立った。卒業生答辞では溢れる涙を堪えながら一言一言を噛みしめるように語る卒業生の姿に、会場中が深く心を打たれた。そんな高校生活最後の行事である卒業式の様子を取材した。

涙の答辞 卒業生の最後のメッセージ

生徒会長の2年8組中井瑞希さんは在校生代表として卒業生へ送辞を述べた。初対面でも気軽に話しかけてくれたり、わからないことを丁寧に教えてくれたりした卒業生の優しい姿が印象に残っているという。「今まで先輩方が築いてきた学校の雰囲気や学校生活での姿を思い出しながら聞いてほしい」と思いを胸に、緊張感のある会場で大切に丁寧に読み上げた。その思いを受け取るように、旧3年1組曹坂優希乃さんと旧3年6組井澤湧之介さんが卒業生代表として答辞を述べた。3年7組清水春香さんのピアノ演奏とともに、3年間の思い出を振り返りながら、涙を見せる場面もあった。「この答辞を読み終えたら高校生活がすべて終わってしまうと思



矢澤先生(写真左) 松尾先生(写真右)

うと、とても寂しく感じた」と明かす。涙をこらえながら一つひとつの言葉を紡ぐ姿は、卒業生だけでなく会場全体の涙を誘った。また、在校生へ「高校生活は思った以上に早く過ぎていく。やってみたいと思ったことには迷わず一歩踏み出し、自分に素直に楽しんでほしい」とエールを送った。井澤鴻之介さんも同じく「もう高校生活が終わることを感じた」と語り、3年間の振り返りかえると数えきれない思い出が鮮明に蘇り、どんな時もみんなを力合わせて乗り越えかけたがえのない仲間に出会えた高校生活だったという。

3年前の入学式「念ずれば花開く」と学年方針に掲げた丹羽恵美先生。3年間学年主任を務めた丹羽先生は「一人一人がすぐハワフルで学年全体で集まるとさらに大きな力を生む」とそんな学年だったと話す。「中学3年間コロナ禍で高校では仲間とのつながりを意識して一生懸命何かに打ち込んでほしい」という思いを込めた学年方針だった。



丹羽先生の最後のホームルームの様子

多くの来賓や保護者、在校生、先生に見守られながら今年度は284名の卒業生が本校を旅立った。卒業生は担任の先生による呼名に対して力強く応えた。3学年主任を務めた丹羽恵美先生は、「生徒にとっても保護者にとってもすごく記念になる思い出になる日になればいいな」と思っていた。保護者の目線に立つと、自分の子供の名前が呼ばれて自分の子供が立つという動きが見えるのはすごく大事な時です。加えて最後のホームルームで、3年間に涙する生徒や親に充実した3年間だったんだらうなと感じた」と話した。

また担任を務めた3組については「仲間がいる忙しい日々も今ではかけがえない時間だった。理事長表彰は、3年間の努力が報われたと感じ、嬉しい気持ちで胸がいっぱい」と語った。同じく、理事長表彰を受賞したサッカー部を代表して取材を受けた石川柊斗さんは「サッカーの3年間だった。全国の舞台などの経験を通して成長を実感した。上田西でしかできない経験をする事ができた。理事長表彰をいただけて光栄だ」と語った。

3年前、8年ぶりの担任となった矢澤龍一先生は当時「こちらから何かする」というより必要最低限の関わりの中で困った時の拠り所になれる形」で関わり「頼るより自立し当事者同士で解決できる関係を作ってほしい」と理想像を持っていたと語った。3年前の取材では「アクティブに関わりたい」と話していた矢澤先生。実際は「アクティブには関われなかった。8年前の感覚とは違い積極的に関われなかったが立派に育っていて嬉しかった」と振り返った。3年前、7年連続で担任を務めることになった松尾光国先生は当時「需要があるつちが華」と話していた。卒業生が本校で過ごした思い出の3年間には明らかに担任団の努力と生徒に対する深い思いやりがあった。



サッカー部代表として理事長表彰を受ける宮川航汰さん

「理事長表彰を受賞した吹奏楽部を代表して取材を受けた和岡柊斗さんは「様々な感情が揺れ動く中でも、毎日笑顔が溢れた学校生活だった。吹奏楽部の仲間と支え合いながら活動に打ち込み、

からこそできること、自分一人では大きく隣と一緒に小さな力が合わさることとで大きな達成ができるということを学んでほしい」と語り、「行事の時にははずかしくパワーを生み、大いに達成できた」と振り返った丹羽先生。仲間との思い出が詰まった学び舎を巣立つ卒業生の姿は多くの人の心に残った。(中村 七菜)

花開いた「自立」の精神 共に歩んだ3年間

(小林 未侑)

理事長表彰と感謝の辞

(大島 美唯)

(斎藤 瑠心)

予餞会 在校生が思いを伝える

「激動・感動・始動」 三年生へ感謝とエール



在校生が飛ばす紙飛行機を見上げる卒業生の様子

3月6日(金)に予餞会が行われた。生徒会による新たな試みや有志企画、部活動の発表など、多彩な演出で会場は大きな盛り上がりを見せた。「激動・感動・始動」をテーマに、在校生から卒業生へ感謝とエールが送られた。企画担当若手や卒業生へ感謝を取材した。(菊池ひとみ)

新たな企画に挑戦

激動の3年間を振り返り最後の1日を感動に包み、新たな始動へと進んでもらうという願いから「激動・感動・始動」というテーマになった今年度の予餞会は第67期生徒会の目標である「挑戦」の言葉通り初の試みが多く見られた。メイン企画のクイズメモリートレースに在校生による合唱に因んだ紙飛行機企画や新しい合唱体形など約1か月前から頭を捻らせた試行錯誤を経て実現に繋がった。クイズメモリートレー

スには倉島和佳さんを合わせた役員と生徒会担当の森下暁先生、山本海晴先生で作った企画。メイン企画を生み出すまでに「どうしたら3年間楽しんだかを振り返ってもらえるのか」と考え、多くの課題を乗り越えながら形にしたという。「期間が短く中で練りに練った企画だった。生徒のやりたいうことと指導ラインを区別することが大変だった」と先生方も苦労を語った。「企画の発想に驚いた」「後輩たちが準備してくれた



司会を務めるマンツティさん (写真中央右)

予餞会を牽引 今年度の予餞会を司会を務め、会場を大いに盛り上げた副生徒会長のマンツティカズオさん。予餞会を終えた今の心境を取材した。

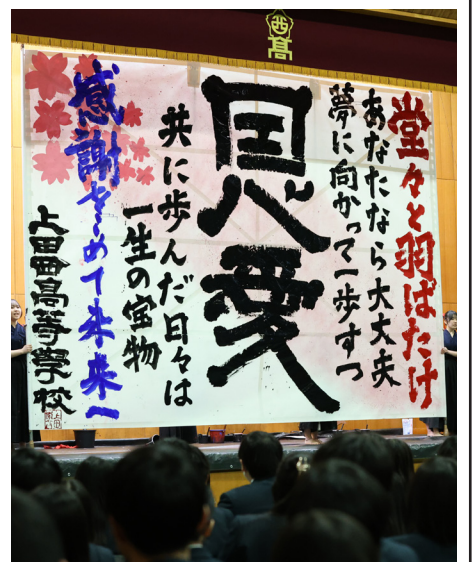
ことが伝わって嬉しかった」と卒業生が大盛り上がりを見せ、笑顔溢れる時間となった。サブプライズ紙飛行機はマンツティカズオさんが主体となって作り上げた。紙飛行機制作の決め手は「新しい道へ前向きに進んでほしい」という思いだという。大きな紙飛行機に加えて在校生全員が卒業生のために紙飛行機を折った。在校生が卒業生を囲む形で歌った「365日の紙飛行機」の最後には紙飛行機を飛ばした。サブプライズは大成功し色とりどりの紙飛行機は卒業生の目を奪った。少し驚いた様子を見せたが、楽しそうな表情で予餞会の素晴らしい締めくくりとなった。(斎藤 瑠心)

努力の先に待っていた「一等

抽選会で1等を当てた放送委員会の元委員長である成沢幸之助さんに高校生活について話を聞いた。

成沢さんはこの3年間を「挑戦の3年間」と振り返り、「放送委員長としての活動に加え、オーストラリアへの3か月間の留学や地域活動にも積極的に取り組んできた。これらの経験を通して、自分から行動することで世界が広がることを実感した」と語った。「また、西高は先生方がやりたいことを後押ししてくれる環境があり、放送活動や国際交流などを通して自分のアイデアを形にする機会に恵まれた」と話す。大学でも積極的な姿勢で企画された。例年とは異なる新しい企画にも果敢に挑戦。3年生だけでなく在校生にとっても心に残る行事となった。マンツティさんは、会場の様子を見ながら部分的にアドリブを入れるなど、臨機応変な進行を意識したという。「次にどのような言葉をかければよいか考えながら進めた。会場が盛り上がる様子を見て嬉しく感じた」と振り返った。

一方、「個人的には改善できる点もあった。今回の経験を今後の行事にも生かしていきたい」と次への意欲を語ってくれた。(菊池ひとみ)



書道部から卒業生に向けられた「恩愛」の文字



1等のディズニーペアチケットを当てた 成沢さん

勢で将来の夢に向かい、諦めずに挑戦を続けていきたいとしている。さらに、抽選会で1等のディズニーペアチケットが当たった際には周囲の歓声を聞き、「高校生生活を頑張ってきたよかったです」と感じるほど嬉しかった。今年の運を使い切ったのではないかと思っほどの喜びだった」とその時の喜びを振り返り、「誰が行くかはまだ決めていないが、高校生活の思い出として友人と行きたい」と話していた。

歌と書で贈る感謝の門出

有志企画では、毎年恒例になりつつあるサッカー部と吹奏楽部がコラボした歌の贈り物に加え、今回は書道部によるパフォーマンスも盛り込まれた。吹奏楽部は、この日のために練習を重ね、その思いは3年生の心に届いたことだろう。

コラム テーマ掲げ、感謝を形に

今年の卒業生にはどんなイメージがあるだろうか。元氣、個性豊か。サッカー、吹奏楽、レスリング等の異彩を放つ者の多さを思い浮かべるだろう。そんな卒業生のために開かれた予餞会は初の試みの企画で溢れていた。今年の予餞会のテーマは激動・感動・始動。卒業生を楽しませたいという一心で新しいことに挑戦する生徒会役員の強い気持が予餞会の節目に現れていた。そんな予餞会は確実に盛り上がりを見せていた。例年とは異なり「卒業生だけの行事」ではなく、在校生を巻き込み全校生徒が卒業生を楽しませるムードだと感じた。予餞会翌日に行われた卒業式では堂々とした入場、呼名時の返事など今年の卒業生の「らしさ」を感じさせた。今年も西高生士の活躍が光る年となった。誰かよりも1歩先で大きな舞台を掴み、長野県に留まらず日本、世界を輝いた卒業生が卒業後、更なる高みを目指しどんな活躍を見せてくれるのか楽しみだ。(斎藤 瑠心)